

# 日本の英語教育と私の英語力

愛知学院大学助教授 島 岩

## 日本の英語教育と私の英語力

名古屋大学でインド哲学を専攻した私は、修士に入学した頃から、インドで直接インド哲学の研究をしたいと考え始めていた。しかし、その頃、日本ですら、バイトで生計をたてなければならぬような状態だった私にとって、私費留学など思いもつかず、インドに行く唯一の手

段は、国費留学しかなかった。そのためにはまず、留学生試験に通る必要があったのである。

だが、留学生試験と言えば、まず問題になるのが、なんといっても英語力、それも、コミュニケーションの手段としての英語の能力である。ところが、その当時の日本の学校での英語教育は、文法と読解が中心で、英語を通して自己を表現する訓練は、全くと言っていいほど行われていなかった。すなわち、英語の能力をト

文字	音声	媒体能力
読解力	聴解力	理解力
作文力	会話力	表理力

「タルに考える」と、次のような図に表されるが、この中の四分の一に当たる能力（読解力）を養成するところが、学校での英語教育の中心だったのである。いや、もっと正確に言えば読解力の中にも、日本語に翻訳しながら読むという精読力と話の全体の内容を大きくとらえるという多読力とがあるわけだから、このうちの精読力ばかりを重視していた英語教育は、極端に言えば、英語力全体の八分の一能力を訓練する教育であったと言っている。もちろん、日常生活のなかで外国人と接する機会のない日本では、学校教育において、文法と読解による基礎的な英語力を養成することに重点を置くのは、理解できる。また、

明治以降、西洋文明を、文字を通して早急に吸収する必要があったという、歴史的事情のせいで、読解中心の語学教育となったということも、やむをえないものとして理解しよう。さらには、日本の大学の文科系、特に、文学部での教育研究が、古典研究を中心としており、そのためには、古典が読める英語力の養成に重点が置かれてきたという事情も理解しようものである。しかしながら、それでも、四分の一の英語力養成のためにこれまで費やされてきた膨大な時間とエネルギーを思えば、これまでの英語教育は、あまりにいびつなものであったと言わざるを得ないであろう。そして、この点が、現在の日本の国際化への動きのなかで、批判され、改善されるべき課題となっているところなのである。

このような事情はともあれ、留学生試験を半年後にひかえた私は、残りの四分の三の英語力を、英会話学校に通う経済的余裕もない状況の

なかで、急遽、それも自分で、養成しなければならぬという、絶望的な作業に取り組まざるをえなかった。そこで考えたのが、(一)大学のESS(英会話クラブ)に入ることと、(二)日本に来てゐる留学生と友達になることという、お金のいらぬ二つの方法であつた。

ESSでは、『アメリカ口語教本』の中級をテキストとして用い、毎日昼休みに集まって会話の練習をしていた。修士にもなつて、学部の一組と一緒にクラブ活動をするというのも気がひけたが、背に腹はかえられず、しばらく通つた。しかし、そのうち、日本人どうして会話の練習をしていても、それはしよせん畳の上の水練で、もの役にはたたないのだということが分かつてきた。すなわち、少なくとも私の場合には、英語でどうしても伝えたいこと、あるいは、伝える必要のあることがあつてはじめて、会話が成り立つのであつて、会話の形式ばかり練習し

ても駄目だということに気づいたのであつた。それに、日本人どうしが英語でしゃべることにはたいする照れがどうしても抜けず、それが英語での発話を妨げる心理的障害となり続けた。

そこで私は、ESSはあきらめ、留学生との接触を深めることにした。ただし、言いたいこと、表現したいことを、英語という外国語を通して表現するには、自分の頭のなかに、日本語とは異なる表現回路を刻みつけておく必要があると思つていたので、『アメリカ口語教本』の中級のテキストは、学校への行き帰りを利用して、歩きながら、すべて暗記しておいた。そして、その一方で、ビルマからの留学生とつきあつたり、その頃、交換留学生としてインド哲学研究室に来ていたケールさんに、日本語を教えるという形で、英会話の訓練を積んだのであつた。しかし、それでも、留学生試験はおろか、外国で生活するにはまだまだ足りない英語力しか



朝もやの中で

つかないという状態で、留学生試験にのぞまざるをえなかったのであった。

### インド政府留学生試験

コミュニケーションの手段としての英語能力をつけようと悪闘苦闘していたわりには、さほど英語力のつかないまま、ほぼ半年後に、私は、インド政府留学生試験にのぞむことになった。このままでは、合格はおぼつかないと思った私は、留学生試験にさいして、まず、次のようなことを考えた。「留学生試験の面接では、必ず聞かれる質問があるはずである。つまり、試験官が最も知りたいのは、留学の理由がしっかりしているかどうかという点である。従って、(一)いままでどんな勉強をしてきたのか、(二)インドでどんな勉強をしたいのか、ということはず聞かれるはずである。さらに、面接の時間は

限られており、せいぜい長くて二十分であろう。だが、そのあいだに、試験官にいろいろなことを質問させてしまつては、私の英語力では、何を質問されたのかも理解できないという状況にたたされてしまうこともあるだろう。従つて、試験官にいろいろと質問させないことが肝要である。すなわち、面接時間一杯こちらがしゃべつてしまえばいいのだ」と。このように考えて、私は、先の二つの質問が出たら、とにかく、一つ十五分以上はしゃべりまくれるよう、答えを暗記した。すなわち、頭のスイッチをひねれば、自動的に答えが英語で出てくるという、「人間テーパーコーダー作戦」をとつたのであつた。

それから、次のようなことも考えた。「インド哲学を勉強した者の特色は、現代ではインド人にとつても難解な古典語サンスクリット(梵語)を学んだという点である。この特色を生かさな

暗記しておいて、暗唱してみせてやろう。そして、煙に巻いてやろう」と。そこで、私は、インド人に最も親しまれているヒンドゥー教の聖典『バガヴァッド・ギーター』の最初の部分を、それも、テープを聞いて節つきで、暗唱していったのであつた。名付けて、「目玉商品作戦」である。

以上のような準備のもとに、インド政府留学生試験にのぞんだ。昭和四十八年の冬、寒いなか、東京の九段の靖国神社近くのインド大使館で、試験が行われた。

まず、午前中に筆記試験があつた。問題は大きく二問に分かれ、一問は、インドについて大きく論ずるようなたぐいの問題であつた。そして、もう一問は、インドの有名な人や出来事について、それぞれ簡単に説明せよという問題であつた。私の斜め前で試験を受けていた女性は、解答用紙三枚にわたつて、英語で筆を走らせて

いた。ところが、私のほうは、一枚の三分の二程度書いたところで、時間がきてしまった。

午後の面接では、当初の予想どおり、(一)いまままで何を研究してきたのか、(二)インドで何をやりたいのかについて、質問された。私は、人間テープレコーダよろしく、質問に答えていった。ところが、「大学ではサンスクリット語を勉強しました」と答えたとき、比較的颜色の白いインド人が、突然、サンスクリット語をしゃべりはじめた。そして、「今言ったことを訳してみろ」と言われたのであった。その当時の私のサンスクリット語の能力は、貧弱な英語力のその足元にも及ばないという状態で、五、六行読むのに、辞書を引きまくって、ゆうに一時間はかかるというお粗末このうえない程度のものであった。「タパス」(苦行)という語が聞き取れた以外、皆目なにも分からなかった。しかし、半ば無意識に、分かりませんと言っではお終いだ



と思い、「タパス」という語だけがよく聞き取れなかったふりをした。すると、今度は、別のインド人が、「タパスとは何か」という質問を發した。私は、冷汗をかきながらも、話題がかわったことにほっとして、「タパスとは苦行である」と答えた。するとまた、さきほどサンスクリット語をしゃべったインド人が、「この人は本当にサンスクリット語ができるのだろうか」という

ような疑わしい目付きで、質問した。「なにかサンスクリット語の作品で暗唱しているものがあれば、言ってみなさい」と。私は、かねて用意の『バガヴァッド・ギーター』の一節を、節つきで暗唱してみせた。すると、突然、その場の雰囲気は、面接から談笑に変わり、面接は終わった。発表はその日の夕方であった。私は合格していた。それも、七、八人中とは言え、トップであった。

私が合格したのは、ひとえに、『バガヴァッド・ギーター』を暗唱したおかげである。その当時は、そのことを、ただ、ラッキーだとは思わなかった。英語も怪しい私を合格させた背後には、『バガヴァッド・ギーター』に代表されるような自国の精神文化にたいするインド人の深い誇りと、自国の精神文化を学ぼうとする者に対する広い寛容があったのだ、ということに思い当たるのは、留学後かなりたってからのこ

とである。

## インド最初の夜

インド政府留学生試験には受かったものの、日本からの仕送りをあてにできない私の経済状態では、渡航費自己負担、月四百ルピー（当時一万二千円程度）の奨学金で、インドの大学院の修士過程二年間を過ごすことは、困難であると考えた。そこで、日本政府の奨学生試験を受け直し、結局は、名古屋大学とプーナ大学との交換留学生第二号として、インドに留学することとなった。

昭和四十九年の九月初旬、私は、羽田をたち、インドへ向かった。心は、まだ見ぬ憧れの国インドへの期待に満ちていた。ボンベイのサンタ・クルス空港に着いたのは、もう、夜も遅かった。二時間以上もかかって税関を通り、疲れ

果てて外にでると、待ちうけていたのは、ポーターとタクシー運転手たちの群れであった。ポーターは子供が多かった。「こんな子供たちが、こんなに夜遅くまで働いているなんて」と感慨にひたる間も、また、「最初に値段の交渉をしておかないとボラれるぞ」と身構える間もなく、子供たちは、人なつっこい顔で私のそばにすりより、あつというまに荷物をとり、先を歩いて行く。こちらもしかたなく、そのあとを追う。彼らは、慣れたもので、私にドルをルピーに換金させると、さつさと顔見知り運転手のところへと案内する。私は、請われるまま、円の感覚で、十ルピー（当時三百円程度）をチップとして渡す。これは、インド人のチップの相場の十倍だ。

タクシーはボンベイの夜の町を走る。道端には、路上生活者たちが眠っている。タクシーが交差点でとまると、物乞いがよってくる。そし

て、バクシーシー（金おくれ）と窓から手を入れる。外は、夜とはいえ、まだ蒸し暑い。牛糞だろうか、変な臭いがただよってくる。しかし、不思議と嫌悪感はない。なにか懐かしい気がする。田舎で育った私の子供の頃には、まだ、道路は舗装されていなかった。その道を、ときには、牛や馬も通っていた。馬の引く荷車に乗せてもらい、藁の臭いに包まれて、学校から帰ってきたこともあった。橋の下で寝起きしていた浮浪者が珍しくて、友達と差し入れをもつていき、薪の火をかこみながら、いろんな話を聞かせてもらったこともあった。こんなことが、風とともに流れ込んでくる泥の臭い、糞の臭い、人の垢じみた体臭とともに、次々と脳裏に浮かんできた。タイム・マシーンで子供のころに戻ったような、とても懐かしい気持ちでした。

サン・エヌ・サンド・ホテルに着いた。タクシー代は百ルピー（当時三千円程度）払った。





これも、相場の五倍以上だ。でもそんな現実感  
はなかった。ボーイに案内され、部屋に入る。  
三百ルーピー程度(約一万円)の部屋だ。ホテル  
の外とは全くの別世界だ。絨毯のしきつめられ  
た二つの部屋とバス・タブのある浴室。一つは、  
応接セットのある部屋、もう一つは、ツイン・  
ベッドの部屋。洋画でしか見たことのない世界

だ。子供時代の田舎から、突然、映画の世界に  
きたようだ。まるで現実感がもどらない。映画  
の主人公気分です。バス・タブにつかり、ともかく  
眠る。朝がきた。時差のせいだろうか(インドは  
日本より三時間半夜明けが遅い)、五時に目覚め  
る。ベッドの上でグズグズしているうちに、六  
時になる。日が差し込んでくる。寝室から出て、

応接セットのある部屋へ出る。ドアの下に新聞が差し込まれている。新聞を読んでいると、やがて、ボーイが朝食を運んでくる。甘いインド・ティーとスクランブル・エッグ、それに、ジュースと焼きすぎの食パン。食パンにママレードとバターをつけて食べる。優雅な朝。ここはどこだろう。あの貧しいインドなのだろうか。本当に、昨晚、あの汚い町を通ってここにきたのだろうか。とても不思議な気持ちをした。

このとき感じた不思議な気持ちは、今考えてみると、やはり、インドの持つ多様性にたいする驚きの念であつたように思う。ほとんどの人が中流だと思ひ込んでいる均一な人々の国日本から来た私には、田舎の子供時代を思ひださせる町並みと超近代的な高層ビルのホテルとが、また、午後の臭いがただよい路上生活者の眠る町と映画の中の世界のような最高級ホテルとが、同じ時代、同じ場所に併存するということが、信じられなかったのである。

ともあれ、この二つの世界の落差に対する不思議な気持ち、それが、私と現実のインドとの最初の出会いであつた。そして、その気持ちから、重層的で多様なインド世界へと私を関わらせ続ける一つの根つことなつていったような気がするのである。

## プーナへの道

——ダメ・モト主義のインド人——

インドに着いた翌朝、私は、ホテルを朝早く出て、ボンベイのヴィクトリア・ターミナル駅へ向かった。そこから、私の留学先プーナへの汽車に乗ろうというのだ。タクシーで駅に着いていた。しかし、まず、切符の買い方が分からない。一等で行くつもりだったが、どの汽車がプーナを通るのか、また、どこで一等の切

符を買えばいいのかが分からないのだ。駅の構内をうろろうろしていると、また、怪しげなインド人につかまってしまった。若い男だ。人なつっこく近付いてきて、「困っていることがあるなら、助けよう」と親切げに言う。「プーナに行きたいのだけれど、切符の買い方がわからないんだ」と、私も今思えばとぼけたことを言うと、彼は、「切符売り場に案内してやる。でも、その前に、ドルをルピーに換えないか」と言う。

「どうゆうことだ」と聞くと、「銀行より換金レートがいいところがあるんだ」と言うのだ。その頃、私はまだ、ブラックマーケットの存在など知らなかった。ドルを銀行以外のところでルピーに換えることができるなどとは、つゆ知らなかったのである。ともかく、なんでも、乗りかかった船にはすぐ乗ってしまうほうだから、一緒に行ってみることにした。彼は、駅を出て、狭い裏通りの路地を幾重にも回って歩いてい

く。「ここではぐれたら、もう帰り道は分からないだろうな」と思いながら、私もあとを歩いて行く。着いた所は、ミシンを踏んで着物を縫っているおじさんのところだった。「こんな所で換金なんかできるのかな」と思いつつ、言われるままに、ドル札を出し、ルピーと交換する。確かに、昨夜、空港の銀行で換金したときより、換金レートはわずかながらいい。なんだか、儲かった気分だ、駅に戻る。

彼は、案内した手数料をいくらかくれと言う。こちらにも、儲かった気分なので、気前よく、百ルピー（当時三千円程度）ほど手渡す。それから、駅員のところまで連れられて、切符を買う。確かに、一等で、プーナまでの切符だ。彼は、「まだ、汽車が来るまで、時間があるから、お茶でも飲もう」という。こちらにも、なんだか、世話になった気分だ、駅の二階の食堂へ行き、お茶を飲む。話しているうちに、彼は、「記念に

なにかくれ」と言う。「できれば、日本のお金がいい」と言う。こちら、まだ、世話になった気分なので、ホイホイと記念に、千円渡ししてしまう。「じゃあ元気でね」と別れる。ここで、ふと、考える。そして、結局、ブラックマーケットで換金して浮いた分以上のお金を、手数料と記念のお金でとられてしまったことに気付く。しかし妙に腹も立たない。向こうがあまりに当然という感じで要求してくるので、それも、おしつけがましいところはあるにしろ、人なつっこく言ってくるので、なんだかアツケラカンとしていて、嫌な感じがしないのだ。

この人が、私がインドで最初に、お茶を飲みながら話をしたインド人である。確かに、日本には稀なタイプだなあと妙に感心した。『気配りのすすめ』とかいう本が、一時、日本でベストセラーになったことがあったが、そんな気配りなんか糞くらえというヴァイタリティーのよう



なものを感じたのである。すなわち、日本では、人間関係の持ち方が緻密というか、自分の言葉や態度にたいする相手の反応を頭のどこかであらかじめ予想しながら人と対応しなければならぬというようなところが、また、なにかのことで一旦気を悪くされてしまうと、あと、取り返しがつかないというところがあるが、インドではそうでもないのかもしれないという予

感がしたのであった。そして、事実、彼は、インド人の一つの典型的なタイプであった。そののちの留学期間中にも、彼のように、駄目で元々という感じで様々なことを要求し、そのかわり、駄目でも、ケロッツとしている、という人たちに、多く出会った。そして、私は、彼らを、「ダメ・モト主義のインド人」と名付け、自らも、彼らと対応するときには、インド人の上を行く「ダメ・モト主義」たらんとする戦いを挑むのであるが、残念ながら、その戦いは、いつも、負け戦であった。ただ、その負け戦のなかで、「嫌なことははっきり嫌だと言えばいいのだ」「ようするに言いたいことを言えればいいのだ」という態度は徐々に身につけていったように思う。ただし、そのことが、逆に、日本に帰ってからは、しばらくのあいだ、謙讓の美德や根回しになじめないという形で、日本社会への不適合となって現れてくるのではあるが。

(つづく)

